

[D年] 受難節第1主日(2024年2月18日)**【旧約聖書日課】 出エジプト記 17章3～7節**

³しかし、民は喉が渇いてしかたないので、モーセに向かって不平を述べた。「なぜ、我々をエジプトから導き上ったのか。わたしも子供たちも、家畜までも渇きで殺すためなのか。」⁴モーセは主に、「わたしはこの民をどうすればよいのですか。彼らは今にも、わたしを石で打ち殺そうとしています」と叫ぶと、⁵主はモーセに言われた。「イスラエルの長老数名を伴い、民の前進め。また、ナイル川を打った杖を持って行くがよい。⁶見よ、わたしはホレブの岩の上であなたの前に立つ。あなたはその岩を打て。そこから水が出て、民は飲むことができる。」モーセは、イスラエルの長老たちの目の前でそのとおりにした。⁷彼は、その場所をマサ(試し)とメリバ(争い)と名付けた。イスラエルの人々が、「果たして、主は我々の間におられるのかどうか」と言って、モーセと争い、主を試したからである。

【使徒書日課】 ヘブライ人への手紙 4章12～16節

¹²というのは、神の言葉は生きており、力を發揮し、どんな両刃の剣よりも鋭く、精神と霊、関節と骨髄とを切り離すほどに刺し通して、心の思いや考えを見分けることができるからです。¹³更に、神の御前では隠れた被造物は一つもなく、すべてのものが神の目には裸であり、さらけ出されているのです。この神に対して、わたしたちは自分のことを申し述べねばなりません。¹⁴さて、わたしたちには、もろもろの天を通過された偉大な大祭司、神の子イエスが与えられているのですから、わたしたちの公に言い表している信仰をしっかりと保とうではありませんか。¹⁵この大祭司は、わたしたちの弱さに同情できない方ではなく、罪を犯されなかったが、あらゆる点において、わたしたちと同様に試練に遭われたのです。¹⁶だから、憐れみを受け、恵みにあずかって、時宜にかなった助けをいただくために、大胆に恵みの座に近づこうではありませんか。

【福音書日課】 マタイによる福音書 4章1～11節

¹さて、イエスは悪魔から誘惑を受けるため、「霊」に導かれて荒野に行かれた。²そして四十日間、昼も夜も断食した後、空腹を覚えられた。³すると、誘惑する者が来て、イエスに言った。「神の子なら、これらの石がパンになるように命じたらどうだ。」⁴イエスはお答えになった。「『人はパンだけで生きるものではない。神の口から出る一つ一つの言葉で生きる。』と書いてある。」⁵次に、悪魔はイエスを聖なる都に連れて行き、神殿の屋根の端に立たせて、⁶言った。「神の子なら、飛び降りたらどうだ。」
『神があなたのために天使たちに命じると、あなたの足が石に打ち当たることのないように、天使たちは手であなたを支える。』

と書いてある。」⁷イエスは、「『あなたの神である主を試してはならない』とも書いてある」と言われた。⁸更に、悪魔はイエスを非常に高い山に連れて行き、世のすべての国々とその繁栄ぶりを見せて、⁹「もし、ひれ伏してわたしを拝むなら、これをみんな与えよう」と言った。¹⁰すると、イエスは言われた。「退け、サタン。」
『あなたの神である主を拝み、ただ主に仕えよ』と書いてある。」¹¹そこで、悪魔は離れ去った。すると、天使たちが来てイエスに仕えた。

【創立記念礼拝 聖書朗読箇所】**エレミヤ書 31章15～17節**

¹⁵主はこう言われる。

ラマで声が聞こえる

苦悩に満ちて嘆き、泣く声が。

ラケルが息子たちのゆえに泣いている。

彼女は慰めを拒む

息子たちはもういないのだから。

¹⁶主はこう言われる。

泣きやむがよい。

目から涙をぬぐいなさい。

あなたの苦しみは報いられる、と主は言われる。

息子たちは敵の国から帰って来る。

¹⁷あなたの未来には希望がある、と主は言われる。

息子たちは自分の国に帰って来る。

ルカによる福音書 7章11～17節

¹¹それから間もなく、イエスはナインという町に行かれた。弟子たちや大勢の群衆も一緒であった。

¹²イエスが町の門に近づかれると、ちょうど、ある母親の一人息子が死んで、棺が担ぎ出されるころだった。その母親はやもめであって、町の人が大勢そばに付き添っていた。¹³主はこの母親を見て、憐れに思い、「もう泣かなくともよい」と言われた。¹⁴そして、近づいて棺に手を触れられると、担いでいる人たちは立ち止まった。イエスは、「若者よ、あなたに言う。起きなさい」と言われた。¹⁵すると、死人は起き上がってものを言い始めた。イエスは息子をその母親にお返しになった。¹⁶人々は皆恐れを抱き、神を賛美して、「大預言者が我々の間に現れた」と言い、また、「神はその民を心にかけてくださった」と言った。¹⁷イエスについてのこの話は、ユダヤの全土と周りの地方一帯に広まった。

『聖書協会共同訳』（2018年版）読み比べ

出エジプト記 17章3～7節

¹イスラエルの全会衆は、主の命によりシンの荒れ野を出発し、旅を重ねて、レフィディムに宿営した。しかし、そこには民の飲む水がなかった。²民はモーセと争い争いになり、「飲み水をください」と言った。モーセは彼らに言った。「なぜあなたがたは私と争い争うのか。なぜ主を試すのか。」³しかし、民はそこで水を渴望し、モーセに対して不平を述べた。「私たちがエジプトから上らせたのは何だったのですか。私や子どもたちや家畜を渴きて死なせるためだったのですか。」⁴そこでモーセは主に叫んだ。「私はこの民をどうすればよいのでしょうか。彼らは今にも私を石で打ち殺そうとしています。」⁵主はモーセに言われた。「民の前を通り、イスラエルの長老を何名か一緒に連れて行きなさい。ナイル川を打った杖も手に取って行きなさい。」⁶私はホレブの岩の上であなたの前に立つ。あなたがその岩を打つと、そこから水が出て、民はそれを飲む。」モーセはイスラエルの長老たちの目の前でそのとおりに行った。⁷そして、モーセはその場所をマサとメリバと名付けた。イスラエルの人々が、「主が私たちの間におられるのかどうか」と言って、モーセと争い争い、主を試したからである。

ヘブライ人への手紙4章12～16節

¹²神の言葉が生きていて、力があり、いかなる両刃の剣よりも鋭く、魂と霊、関節と骨髄とを切り離すまでに刺し通して、心の思いや考えを見分けることができます。¹³神の前にあらわでない被造物はなく、すべてのものは神の目に裸であり、逃れることはできません。私たちはこの神に弁明しなければなりません。¹⁴さて、私たちには、もろもろの天を通して来られた偉大な大祭司、神の子イエスがおられるのですから、信仰の告白をしっかりと保とうではありませんか。¹⁵この大祭司は、私たちの弱さに同情できない方ではなく、罪は犯されなかったが、あらゆる点で同じよう試練に遭われたのです。¹⁶それゆえ、憐れみを受け、恵みにあずかって、時宜に適った助けを受けるために、堂々と恵みの座に近づこうではありませんか。

マタイによる福音書4章1～11節

¹さて、イエスは悪魔から試みを受けるため、霊に導かれて荒れ野に行かれた。²そして四十日四十夜、断食した後、空腹を覚えられた。³すると、試みる者が近づいて来てイエスに言った。「神の子なら、これらの石がパンになるように命じたらどうだ。」⁴イエスはお答えになった。

「『人はパンだけで生きるものではなく、神の口から出る一つ一つの言葉によって生きる』と書いてある。」

⁵次に、悪魔はイエスを聖なる都に連れて行き、神殿の端に立たせて、⁶言った。「神の子なら、飛び降りたらどうだ。」

『神があなたのために天使たちに命じると彼らはあなたを両手で支えあなたの足が石に打ち当たらないようにする』

と書いてある。」⁷イエスは言われた。「『あなたの神である主を試してはならない』とも書いてある。」

⁸さらに、悪魔はイエスを非常に高い山に連れて行き、世のすべての国々とその栄華を見せて、⁹言った。「もし、ひれ伏して私を拝むなら、これを全部与えよう。」¹⁰すると、イエスは言われた。「退け、サタン。」

『あなたの神である主を拝み、ただ主に仕えよ』

と書いてある。」¹¹そこで、悪魔は離れ去った。すると、天使たちが近づいて来て、イエスに仕えた。

【創立記念礼拝 聖書朗読箇所】

エレミヤ書 31章15～17節

¹⁵主はこう言われる。

ラマで声が聞こえる

激しく嘆き、泣く声が。

ラケルがその子らのゆえに泣き

子らのゆえに慰めを拒んでいる

彼らはもういないのだから。

¹⁶主はこう言われる。

あなたの泣く声を

目の涙を抑えなさい。

あなたの労苦には報いがあるからだ---主の仰せ。

彼らは敵の国から帰って来る。

¹⁷あなたの未来には希望がある---主の仰せ。

子らは自分の国に帰って来る。

ルカによる福音書 7章11～17節

¹¹それから間もなく、イエスはナインという町に行かれた。弟子たちや大勢の群衆も一緒にあった。

¹²イエスが町の門に近づかれると、ちょうど、ある母親の一人息子が死んで、担ぎ出されるころだった。母親はやもめであって、町の人が大勢そばに付き添っていた。¹³主はこの母親を見て、憐れに思い、「もう泣かなくともよい」と言われた。¹⁴そして、近寄って棺に触れると、担いでいた人たちは立ち止まった。イエスは、「若者よ、あなたに言う。起きなさい」と言われた。¹⁵すると、その死人は起き上がってものを言い始めた。イエスは息子を母親にお渡しになった。¹⁶人々は皆恐れを抱き、「偉大な預言者が我々の間に現れた」と言い、また、「神はその民を顧みてくださった」と言って、神を崇めた。¹⁷イエスについてのこの話は、ユダヤ全土と周りの地方一帯に広まった。

黙想のためのノート**次主日の教会暦と聖書日課**

・2月18日「受難節第1主日」の日課主題は「荒れ野の誘惑」。教会暦は、「灰の水曜日」から6週余りの「受難節」に入る。「受難節」の期間は、主イエスの「荒れ野の断食」に倣い四十日間(日曜日を除く)が定められてきた。

・旧約聖書日課は、「出エジプト記」から、「メリバの水の逸話」の箇所。使徒書日課は、「ヘブライ人への手紙」から、神の民の安息として神の言葉が告げられることを教える箇所。福音書日課は、「マタイによる福音書」から、「荒れ野の誘惑」の箇所。

・2月第3日曜日を、石神井教会は「創立記念礼拝」としてきた。今年は、ゲスト説教者を迎えるため、聖書日課に抛らずゲスト説教者指定の箇所を礼拝の聖書朗読とする。指定の聖書箇所は、旧約「エレミヤ書」から、「新しい契約」が告げられる一連の箇所の一部。新約「ルカによる福音書」から、主イエスがやまめの息子をいやした逸話箇所。

旧約日課(出エジプト17章より)

・「出エジプト記」は、ユダヤ正典(ヘブライ語聖書)「律法(トーラー)」の第二巻で、「申命記」まで続く「モーセ物語」の第一部を構成する。本書の構成は、「モーセの誕生譚」から始まり、「モーセの召命譚(柴の箇所)」、「ファラオとの交渉と十の災い」、「過越とエジプトからの出立」、「荒れ野の旅」、「シナイ契約」、「幕屋建設と金の雄牛事件」と展開する。日課箇所は、「荒れ野の旅」の中の一場面、「マナの出来事」に続く「メリバの水の逸話」の箇所。

・「メリバの水(泉)」と呼ばれる逸話は、「民数記」20章にも時期と場所の設定を変えて置かれている。これは、同じ伝承説話が細部を変えて二重に採録された結果なのか、あるいは、別個の伝承説話だったものが同じ原因譚などを導入することで酷似することになった結果なのか、判然としない。いずれにしても、「出エジプト記」と「民数記」の編集者が意図して酷似した逸話を配置したと考えられる。二つの逸話は、「飲み水」を与えよ、という人々の要求に対して主が応え、モーセ(とアロン)は「杖」を携えて「岩」から水を出す、という展開をし、この経緯が「メリバ(争い)の水」の原因譚とされている。他方、両者が異なる点は、どこで起こった出来事であったのか、アロンがモーセと共にいるか、人々の要求に応える主がモーセに命じたことは何だったのか、モーセはどのように振舞ったのか、など多岐にわたる。

・「レフィディム」の場所は、考古学的には特定されていない。しかし、水が出される場所として「ホレブの岩」とあり、「神の山ホレブ」(3:1)の麓が想定されていると考えられる。通例、「ホレブ」は「シナイ山」と同一視されるが、19:2の旅行程譚を厳密に見ると、両山は異なるものと考えられている可能性もある。

使徒書日課(ヘブライ4章)

・「ヘブライ人への手紙」は、新約正典「共同書簡」に分類される書簡文書だが、冒頭にあるべき書簡の様式に則った挨拶文が欠けており、差出人や宛先は不詳となっている。書簡末尾に「兄弟テモテ」への言及があり、東方教会では伝統的に「パウロ書簡集」の一つとして扱われてきたが、2世紀の時点でこれを「パウロ書簡」とすることには教父らにより疑義が呈されている。一般に、本書簡のキリスト論は、各「福音書」や「パウロ書簡」にみられるキリスト論とは異質とみなされており、新約において厳密な意味で聖書的な「贖罪神学」を提示している唯一の書と評されることが多い。

・本書簡は、旧約「律法」の「大祭司」職をイエス・キリストに当てはめて解釈し、大祭司が「贖罪日」の務めとして為す「民のための贖罪の犠牲奉献」を完成させた方としてイエス・キリストを位置づけることを説いている。この際、十字架につけられたキリストは、天来の完全な「大祭司」であると同時に、天来の完全な「犠牲」であるとされ、毎年営まれていた「贖罪日」の祭儀(レビ16章)は、ただ一回の「十字架」によって最終的に完成したと解釈されている。これらの議論の前提として、本書簡にはイエス・キリストを「天」に属しながら「地上」に降臨して来られた方とするキリスト観が見られるが、これは、「ヨハネ福音書」と共通する。

・日課箇所は、天来の理想的「大祭司」としてイエス・キリストを示すにあたって、その方が天的で遠い存在ではなく、地上に降りて来られた方として人の地平で弱さや罪、試練を共有して下さった方であることを、まず確認しようとしている。このようなキリストの神人二重性は、5世紀に開催された「カルケドン公会議」(451年)で「同じ方が真の神であり、真の人である」という定式によって正統教理に位置づけられている。

福音書日課(マタイ4章より)

・日課箇所は、主イエスの「荒れ野の誘惑の逸話」で、共観福音書(マタイ、マルコ、ルカ)が共通して伝えているが、特に「マタイ」と「ルカ」は、詳細な展開を含む逸話として伝えている。ただし、マタイとルカの展開には相違がある。

・「荒れ野の誘惑」は、主イエスが洗礼者ヨハネから洗礼を受けられた後、宣教活動を始める前の段階でのこととして物語られている。これを、洗礼者ヨハネの指導する宗教団体における初期の訓練実践と考える者もあるが、福音書は詳細を明らかにしていない。

・「誘惑」は、「悪魔(ディアボロス)」から受けるものとして物語られるが、そのように仕向けて「荒れ野」に連れ出したのは「霊(プネウマ)」であったとされる。「悪魔(ディアボロス)」は、「向こうに投げる(ディアバッロー)」を原義とする用語で、「中傷する者」の意で広く用いられるが、本福音書の他箇所での用例は少ない(13:39、25:41)。「悪魔」は、「サタン(サターナ)」と同一視されることもあるが、「悪霊(ダイモニオン)」とは区別される。

創立記念礼拝朗読箇所・旧約(エレミヤ 31 章より)

・「エレミヤ書」は、ユダヤ正典(ヘブライ語聖書)「後の預言者」の第二に置かれた預言書。前 7 世紀末～6 世紀初頭の南王国(ユダ)で宮廷預言者として活動したエレミヤの預言活動録と預言集として編纂されている。第一の執筆者として、本書自体に記述のある「書記官バルク」(32 章、36 章、43 章、45 章など)が想定されるが、編集の経緯など詳細は分からない。預言者エレミヤは、前 627 年頃、ヨシヤ王の下で始められていた改革(および北方拡大政策)による地方聖所の中央神殿への統廃合に伴い、ベニヤミン領アナトからエルサレムに招集された祭司で、王国滅亡の頃まで宮廷預言者として活動を続けた(1:1~3)。

・朗読箇所は、王国滅亡の現実に直面する中で、なお「イスラエルとユダ」の回復を告げた預言として記されている。通例、「新しい契約」と呼ばれるまとまりの中にあるが、その具体的な内容に該当するのは、31:31~34 であり、その前提となる主の意図を告げようとする預言の言葉となっている。

・「ラマ」は、ベニヤミン領とエフライム領の境界付近にある地で、「サムエル記」では繰り返し「預言者サムエル」にゆかりの地として言及されている。「ラケル」は、「創世記」の「ヤコブ物語」に登場するヤコブの妻で、第二子「ベニヤミン」を難産した末に死に、ベテルとエフラタ(ベツレヘム)を結ぶ地、ベニヤミン領ツェルツァに葬られたとされている(創 35:19、サム上 10:2 など参照)。この地と「ラマ」との関係は、はっきりしない。

・ラケルは、産んだ子を失った母親ではなく、子を産んで自分が死んでしまった母親であり、ここでの描写とは矛盾する。しかし、「ヤコブ物語」後半の「ヨセフ物語」によれば、ラケルの生んだ二人の息子「ヨセフとベニヤミン」は、いずれも家族から引き離されてエジプトで囚われの身となった者として描かれており、その後、この二人の息子と兄たち、また父ヤコブら家族が再会し、関係を回復するという「ヨセフ物語」の展開を踏まえた預言と解釈するならば、「ユダとイスラエルの回復の預言」という大枠の主旨と一致してくる。

創立記念礼拝朗読箇所・新約(ルカ 7 章より)

・朗読箇所は、「やもめの息子の癒し(復活)」の逸話として知られ、「ルカ福音書」だけが伝えている。共観福音書は、「ヤイロの娘の癒し(復活)」の逸話を共通して伝えており、ルカだけが伝える「やもめの息子の癒し」を主イエスの御業を伝える上で不可欠な逸話とは考えなかったのかもしれない。どちらの癒しも、「起きなさい」(ギリシア語「エゲイロ」の命令形)と告げられて死者が起き上がったと描写されるが(7:14~15、8:54~55)、この語「エゲイロ」は、主イエスの「復活」を描写する際にも用いられる語である(9:22、24:6,34)。

・「一人息子」は、直訳すれば「独り子である息子(モノゲネース・ヒュイオス)」。「独り子(モノゲネース)」という語は、新約中、「ルカ」で 3 例、「ヨハネ文書」で 5 例、

「ヘブライ書」で 1 例しか見られず、「ヨハネ文書」ではもっぱらイエス・キリストを指して用いられている(ヨハネ 1:14,18、3:16,18、1ヨハ 4:9)。他方、「ルカ」は、この箇所の他にも、主イエスに癒される「息子」または「娘」を指して、敢えて「独り子」という強調がされている(ルカ 7:12、8:42、9:38)。「ヘブライ書」の例(ヘブ 11:17)のように、「独り子」である実子の喪失という情況に目を向けさせる意図があると考えられ、「独り子」としての「御子」を失う「御父」という視座を持つことを促そうとしているのかもしれない。

来週の誕生日 (2 月 18 日~24 日)

。

主日礼拝の讃美歌から

- ・21-83 番「聖なるかな」(=I546)は、19 世紀初頭、オーストリア皇帝ヨーゼフ 2 世の教会音楽平明化運動下で、J.ノイマンがミサ典礼文をドイツ語に翻訳し、F.シューベルトに作曲を依頼した「ドイツ・ミサ」の中の一節。ラテン語典礼では「サンクトゥス」と呼ばれ、感謝の祭儀(聖体拝領)の中で歌われる。
- ・21-533 番「どんなときでも」(=E129)は、『こどもさんびか2』(1983 年出版)の編集作業中に提供された、7 歳で病気のため逝去した高橋順子の作詞。高浪晋一が、この詞に合わせて作曲。
- ・21-111 番「信じて仰ぎみる」(=I488)は、19 世紀米国の福音唱歌の一つ。多くの福音唱歌を作詞した S.ベネットが作詞し、友人の音楽家 J.ウェブスターが作曲。ウェブスターが編纂した日曜学校讃美歌集(1868 年)で知られるようになった。

21-83「聖なるかな」**Heilig, Heilig, Heilig! Heilig ist der Herr!**

1. Heilig, heilig, heilig, heilig ist der Herr! / Heilig, heilig, heilig, heilig ist nur Er! / Er, der nie begonnen, / Er, der immer war, ewig ist und waltet, sein wird immerdar.
2. Heilig, heilig, heilig, heilig ist der Herr! / Heilig, heilig, heilig, heilig ist nur Er! / Allmacht, Wunder, Liebe, alles rings umher! / Heilig, heilig, heilig, heilig ist der Herr!

21-111「信じて仰ぎみる」**There's land that is fairer than day**

1. There's a land that is fairer than day, / And by faith we can see it afar, / For the Father waits over the way / To prepare us a dwelling place there.

Refrain:

In the sweet by and by, / We shall meet on that beautiful shore; / In the sweet by and by, / We shall meet on that beautiful shore.

2. We shall sing on that beautiful shore / The melodious songs of the blest; / And our spirits shall sorrow no more - / Not a sigh for the blessing of rest.

[Refrain]

3. To our bountiful Father above, / We will offer our tribute of praise, / For the glorious gift of His love / And the blessings that hallow our days.

[Refrain]